

財田たより

# 多摩川

1980. 9. 第7号



清流にすむマダラカゲロウ(幼虫)



3月8日 日野市法川で行なわれた「立て」で魚をとる子供達

## ■ 川のはなし ■

### ⑦ 多摩のむかし話 (河童の証文—青梅市)

権左<sup>ごんざ</sup>はその昔身を投げて死んだ権左の、うらみ多い淵よ。一反もあるほどのでっけい渦の巻いた淵だった。

この淵のところはな、三田のヤットウ(剣術)道場の馬洗い場だったあど。

その頃、この辺の漁師はな、魚がとれなくなちあて困っててな。夜になるとな、羽村や福生の方までな、魚をとりに行ったあどと。昼間はとりにゆけなかったあどと。

ところがな、ある日の夕方、いつものようにな、三田道場の馬丁が馬を洗いに行つて来て、飼葉を食わして馬を寝かしたあどと。

每晚、夜中になるときまって、腹を空かした馬たちが飼葉おけにぶつかってがたがた音をたてるんだけど、今夜はがたんともしない。馬丁は、「はて、へんだな」と何度も思った。夜が明けるのを待って馬屋へ行ってみると、これじゃあがたんともしない訳だ。飼葉種が見当らない。馬を見ると、何かにおびえたように、ぶるぶるふるえていやあがるあどと。

馬丁はこれはおかしいと、よく見ると飼葉桶が馬小屋のすみにころがっていた。馬丁が飼葉桶をもち上げてみると、その中に赤ん坊位の妙なものがちちかんで入っていた。その妙なものはべこべこおじぎをして、馬丁を拝んでいる。馬丁はびっくりぎょう天して、馬と同じようにふるえながら、「お前はいったい何だ」ときいたらば、妙なものは、「へい、わたしは

拝島の近くの滝と言う所の淵に、なが年住んでいる河童でございます」と言うではないか。河童は、「わたしの住んでる淵より、こちらの魚の方がうまいうまい、と人が申します故、去年の秋からこちらへ参りました。あなた様が馬を洗っておいででしたので、その馬の尻づぼにつかまっていたら、とうとうここへ来てしまいました。どうか命だけはお助け下さいまし」と、悲しそうに言ったあどと。

馬丁はあつけにとられ、どうしたもんかとしているうち、ちょうどこの剣術の先生が、朝の馬の散歩のため来られた。先生はこわい顔をして、「近年、このあたりでは魚が捕れなくて、百姓も漁師もともどもに難渋しているが、みんな貴様のためか。にくい奴だ。わしの刀で切つて捨てるのはわけがないが、神妙にしてから命だけは助けてつかわそう。二度と羽村の堰から上に来てはならぬぞ！」と一かつすると、河童は恐れ入って、「確にかしこまりました。その証しに一筆したためます」と、先生は持っていた矢立をかりて、みみずのような字を何やら書いて置いて行ったあどと。

河童の書いたものを誰も読める人は居なかったが、ひとり字の読めない馬丁だけは、何故かよく読めたあどと。

そうしてな、それからこっちはな、鮎もキバチも元通り、よく捕れたあどと。

(立川むかし話の会編集、三田鶴吉編「角さんの話」より)



並んで歩いていた友人が、ほっとした表情になった。家並みを抜けたところで、初夏の樹林が、うっそうと広がる。中に入るとやや薄暗い。エゴの木が多く、さびしげな花が枝々にびっしり並ぶ。半日近く緊張した話が続いた後だけに、やや疲れた気分の顔には油が浮いていた。ここを保全地域にして、君はいい環境に住めるなど、軽口がでた。少しばかりの郷土愛さ、と返しながらか、この日野市が終生の住み家になるのかなと、今さらのように思い返した。

斜面の下には、段丘崖に沿って黒川が流れる。赤いローム層の崖下には、約一キロにわたって十数ヶ所のハケがあり、清水が噴き出して大きな流れや湿原や池をつくる。

豊田駅へ遊歩道を歩きながら、自然環境保全の条例を制定したころに話題が移った。郊外住宅地での保全地域のモデルにとすぐ思いついたのが、日野の台地を約四キロメートルにわたり取り巻く段丘崖緑地であった。条例制定作業の合間に、数人の専門家と東京都の全域をヘリコプターで観察したときも、一つの実例として上空をせん回しながら説明した。その後、自然保護の仕事から離れたが、実際に地域指定するまでには、担当者の粘り強い努力があったようだ。地元日野市の協力も大きかったが、山口さんを始め地主の方々の協力がきめ手となったのだろう。

こうした話しのあと、日野に住みついで二十年になるのかなと問いかけられた。そういえば、今まで一番長く住んだ場所になる。旅人のようにもう一つ着落かぬ気分が残っていたのが、このごろ生活の場として、心がこの土地にしっかり根づいたようだ。そうなるかと歩く人々も、商店も、山野も生々と映る。

豊田駅から崖下へ下り反転して黒川を下流へ向かう。黒川の源流は、深い雑木林におおわれ水墨画の趣きだ。奥深いところに二つの湧水口があって、大きな池をつくる。雑木林ごとさくで囲ってあるので小鳥が多く、池にはいつの間にか色とりどりのこいの群れが泳ぐようになった。あの木の枝に止まった大きな鳥は何だろうかと見つめると、どうやらオウムのような。どこから逃げ出したのかなと歩き出した。崖下のハケを辿るとどの池にも、小さな流れにも子供が遊んでいる。動物や植物の生物相も豊かだ。十年位前までは、農産物を洗っていた。日野の台地には、縄文時代からの住居跡が多く、土器も大量に出土している。その頃からこの水が湧き出していたとすれば、このあたりの住居群は恐らくこの水で成立っていたのだろう。それらしいこん跡は消えて無いが、歴史の語りかけは幻想を誘い古代と心が結ぶ。やがてこの歴史の中にわれわれのすべでも埋もれることになる。

黒川は中流で今も農業用水に使われている。水田耕作地で農業用水にまぎれてわからなくなるが、最後は浅川に注ぐ。堀ノ内の畑地にはむくの巨木がそびえる。君の家で作業をすると、必ずこの路を散歩させられるそうだが、結構皆なも楽しんでるようだな。もっとも、いつもハードに仕事をさせられるので、ほっとするのだろうかよと、毒舌が続く。毎日の行き帰りにも、また友人や家族との散歩にも、この樹林と流れはどれほど数多くの考えを示しまとめてくれることか。いこいというよりは、何か産み出す路だ。

樹林の間から宅地化されつくした多摩丘陵がちらちらと見える。夜、多摩丘陵に無数の灯がかくすものもなく見えるころは、樹林は落葉して激しい北西風が吹く。それまでに、今手がけた仕事は終るだろうか。新しい住民がこの町にすっかり根づくには何が必要なのだろうか。ここで生れ育った子供らがこの町に愛着を持つにはどうすればいいのか。話は、急に熱っぽくなる。友人はすっかり元気を取り戻したようだ。(東京都公書局副主幹)



### ●サイクリングで多摩川の源流から下流まで

保谷市立碧山小学校六年 小坂 紫陽子

「多摩川の上流から下流まで……どんな変化があるんだろう？」

今にも面白い事が起きるような感じがして丹波山村を出発しました。

これがほんとうに、電車の窓から見たあの広い多摩川なのかなあ、と思う程川はばがせまくて何となく変な気持ちになりました。

ここらへんから、小河内ダムまでの一帯の山々には、水源涵養林（木の種類でいうと落葉樹、ケヤキ・クヌギなど）が、生えています。

水源涵養林があるのは一言でいうと、水を一滴でもムダにしないためだそうです。

もし、ハゲ山に雨がふった場合、だい部分の水が流れてしまって洪水がおこります。

又、日でりになると、すっかり干あがってしまうのです。

しかし、水源涵養林は落葉樹なので葉が落ちて、葉のそうができます。

雨がふると、その落葉に、30%もの水分がすいとられて、洪水はおこりません。

日でりになっても雨の時、すいとられた水分などが、わき水になってくるので干あがりません。

私はこの話を、リーダーから聞いてとても感心しました。

水源涵養林は許可無しでは切ってはいけないそうで、ほとんどが昔のままだそうです。

川はどんどん姿を変えて行きます。

中流・下流になると川はばが、ぐーんと広がって、一段と目立って来たのは川の汚れで、ビニール袋、空きビン……いろいろきたならしい物がういていました。

上流の水は澄き通ってきれいでしたが何となく黒ずんだ緑色ににごっている、という感じで気持ちが悪かったくらいでした。

これまき橋で説明を聞きました。

ここには一つ『し尿しょ理場』があって、川をきれいにと努力しているそうですが相変わらず上流の方で下水設備がととのっていないため、し尿など汚水を川に流しつづけているので、なかなかきれいにならないそうです。

そういえば上流の小さなぶ川に、洗剤のあわがういていました。

何だか昔の人が大事にしていた水をそまつにしているの、悪いことをしているような気がしました。

海に着いた時は、さすがにうれしかったけど、ゴミのういた黒い海はなんだか、かわいそうでした。

## ●ただ今多摩川縦走中

「早起き少年サイクリング教室の延長」といった軽い気持ちで参加したこのキャンプで、思わぬ収穫を得ました。雨の中、水たまりだらけの道を見た時は、さすがにがっかりしましたが、悪条件の中一生懸命下って見た世界最大の飲料水用ダムの小河内ダムや、三百年も前に作られた玉川上水などは、人間の力の偉大さを感じざるを得ませんでした。

しかし、三日目に東京湾を見た時、一瞬は美しく見えたものの、あまりの汚なさ、ゴミの多さががっかりしました。奥多摩では、あんなに美しくあんなに澄んでいた多摩川が、川崎あたりからうす黒い緑になり、東京湾では洗剤の泡や捨てられたゴミで海とは言えないほどになっているのを見て悲しくなりました。羽村のあたりでは都民の水の20%をもまかなっている川が、下流ではあんなに汚れているのを見て、大人は必要な物さえとればあとはどうでもいいのか、これでは恩を仇で返しているようなものではないかと、そんな風にさえ思えました。上流の方で習った昔の人の知恵、

都立石神井高校一年 吉田 晴子

人間の科学力に驚嘆するとともに、人間の愚かさをも知ったと思います。

このすばらしい多摩川の水は、これから成長してゆく我々が守ってやらねばならないものだと痛感し、今まで見てきた川の保護運動も決して他人事ではなく、我々全員が参加すべきものだということが、多摩川とすごした三日間で良く分かったと思います。

美しい溪谷、美しい山、美しい川、すばらしい野鳥たち、そしてみんなで走ったサイクリングロード、いろいろな事を教えて下さった先生方、そしてリーダー達。私達がこの三日間で得たものは大きく、多かったと思いますが、やはり一番はといえば奥多摩や、多摩川というひとつの自然に触れ、共に過ごしたことだと思います。次にこのような機会があったら、走る苦しさの中から自然を学びたいと思います。

昭和55年8月6日

羽田にて

### 新刊紹介

市川 新著

「都市河川の環境科学」

培風館、(昭和50年6月)

2,900円



環境をどのように設計し、維持していくかという問題に対して、必ずしも明確な手法はない。それは環境が多くの変因からなり、きわめて多面的なものであり、それを取り扱う学問ないし研究手法が確立されていないことによる。河川水質につ

いていえば、従来の研究が「理論的」取り扱いが中心であり、現場での水質の変動の実態をあきらかにし、その特性を把握して、計画論に結びつける努力は、必ずしも十分ではなかった。

本書は、本財団の研究助成を含めて多摩川において長年研究調査を行ってきた著者が、その経験とそれに基づく深い洞察力を駆使して、水質管理の理念、水質把握と解析法、さらに予測手法とそれらの計画論への組込み方について実証的に述べたものである。その手法ないし考え方は、環境科学、衛生工学に関連する学生、研究者、水環境に携わる行政機関、企業の職員にとって、研究のあり方・行政の指針策定を考える上できわめて有用な参考書である。

よみがえ

## 甦れ！多摩川



(奥多摩湖)

## 奥多摩湖の水質を保全する

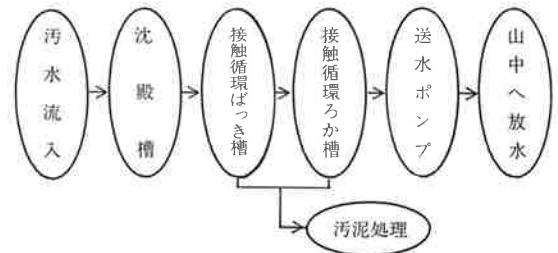
奥多摩湖は、昭和32年年に完成した上水道専用人工湖である。東京都民にとって、いわば最後の水ガメで、約1ヶ月分の水が貯えられている。

この奥多摩湖の周辺は、郊外レクリエーション地として、保養所や旅館などがつくられ、春や夏の観光シーズンには多くの人々が訪れている。又、ダムサイドには、53年にオープンした奥多摩郷土資料館があり、湖底に沈んだ小河内村の郷土芸能や山村の生活用具などの文化財が展示されている。

ところが、湖の周辺につくられる観光施設は、私達にとって歓迎すべきことではあるが、こうした施設から出る汚水は、湖の水質を悪化させる原因にもなりかねない。奥多摩湖の場合は水の滞留時間が長いため湖水が富栄養化すると、アオコなどが発生し、水道原水として不都合な状態になりかねない。

そこで、先につくられた湖畔の東芝保養所と奥多摩郷土資料館では、施設から出る汚水が湖水を汚染しないように処理施設が設けられている。それ

は、土壌浄化方式と呼ばれる汚水処理装置で、土壌中に生息する無数の微生物によって汚水を分解、吸収させるごく単純で自然な方法によるものだ。



表に示した様に、流入した汚水は最初の沈殿槽で大きなゴミを除いた後、砂利をつめその上に土を盛ったいくつかの処理槽の中を循環しながら、微生物によって処理されていく。処理槽の底からは、定期的に空気が送られ、微生物の働きを活発にさせる。そして表面に盛られた土によって悪臭を完全にシャットアウトしているから、一見、その下に汚水処理施設があるとは気づきにくい。

奥多摩郷土館の場合は、処理後の水は、直接、湖に放流しないしくみになっている。処理水は、湖畔からポンプによって裏手の山に運ばれ、尾根の反対側の斜面に散水され、地中に浸みこむようなくみになっているのである。処理後の水は、かなり浄化され、きれいな水になっているのであるが、慎重を期してこのような方法がとられているのである。

この7月、東京都と山梨県は、奥多摩湖の水質保全を計るため水源地帯である丹波山村、小菅村に下水道の整備を行なうよう建設省に要請する事を決めた。わずかな人口でしかないこの集落でさえ、長い時間がたつうちに、湖水にどのような影響を与えるかわからないからであり、まして、汚水されてからでは遅い。諏訪湖や霞ヶ浦の例をみるまでもなく、湖の汚染はあらゆる方面に多大な影響を及ぼす。まして、水道水源湖としての奥多摩湖の場合は大変な問題になるのである。

## 財団の事業紹介

### 〈研究助成〉

昭和52年度から始めました一般研究助成（草の根研究）の成果（下記8件）が「多摩川環境調査助成集（第1巻）」としてこの程完成し、多摩川流域の主な図書館、教育委員会資料室等43ヶ所に寄

贈致しました。皆様方のご利用をお待ちしております。

なお、図書館、教育委員会資料室の場所については財団へお問い合わせ下さい。

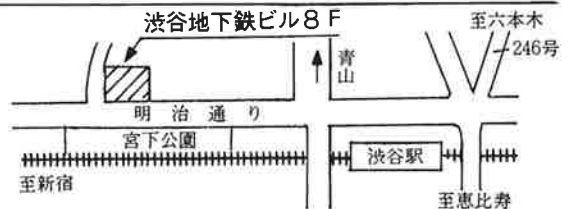
研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
多摩川河川敷の帰化率 —その調査方法の問題点—	田 中 勉	神奈川県立川崎北高等学校教諭
多摩川中流域におけるベントスの周年変化 —ベントスの月別種類及び個体数—	小 林 貞	私立カリタス女子高等学校教諭
多摩川流域でのトウキョウサンショウウオの分布とその生態 —生息環境と体測定値考察—	金 井 郁 夫	八王子市立元八王子中学校教諭
多摩川流域平野の地理学的研究 —地形分類と渡河点との関連について—	内 田 和 子	都立福生高等学校教諭
多摩川に流入する河川、浅川の水質調査 —夏・冬両期に於ける中・下流域1kmごとの調査等—	舩 田 辰 郎	都立日野高等学校教諭
児童、生徒、地域住民による多摩川流域の状態と水質汚濁の調査 —多摩川を探険しよう—	尾 島 俊 夫	羽村町公民館職員
奥多摩水系（多摩川、秋川、平井川）の水質調査 —上流から下流までの水質の変化及び日変化について—	西 野 延 男	五日市町立増戸中学校教諭
生物（ウキクサ、アオウキクサ）を指標とした多摩川の水質と環境の一考察 —ウキクサの生態観察をもとにして—	杉 山 和 子	川崎市立稲田中学校教諭

### 〈編集後記〉

今年の夏は、涼しい日が続いていたので奥多摩や秋川の観光地は人出が少ないかと思っていましたがそれでも旅館や民宿は、家族づれ、学生の合宿などでほぼ満員の状態でした。その夏のある日、この紙面にも登場して下さった、東京杉並Y M C Aの人達と、サイクリングで多摩川を下ってみました。夏の多摩川は、アユ釣りや水遊びの人達で賑うのです

が、さすがに水遊びする人は少なく、釣り人がたくさんでいました。しかし、水際には所々、エサの空袋やアキカンが捨てられて、マナーの悪い釣り人がいる事も確かでした。美しい自然の中での釣りは、単に魚を釣りあげる事だけが目的ではありません。いつまでも気持ち良い釣りが楽しめるようゴミを残さないようなマナーは守っていくべきでしょう。

- 発行日 昭和55年9月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125